

「あ！萌え」の構造

(番外編 その4)

- マイフェアレディとピグマリオン -

総合心理学部 齋藤清二

ミュージカルとして有名な『マイフェアレディ』は、オードリー・ヘプバーンの主演で1960年代に映画化され、最近ではDVDで手軽に観賞することもできる。この作品のあらすじは、20世紀初頭のロンドンを舞台に、貧しい花売り娘として育ったイライザという女性が、ヘンリー・ヒギンズ教授という言語学者のもとで、上流社会に通用することばや礼儀作法を身につけ、本物の淑女として成長していくというストーリーである。一般には一種のシンデレラ・スト

ーリー、あるいは女性のサクセス・ストーリーとして理解されている。しかし、この作品は色々な観点から、とても奥の深い側面を持っている。ここでは幾つかの観点から、この作品について論じてみたい。

『マイフェアレディ』の原作となった小説は、有名なバーナード・ショーによって書かれた『ピグマリオン』である。もともとはギリシア神話に題材が求められている。ピグマリオン自身は彫刻家で、自分の作った女性の彫像にガラテアという名前を付け

て、その彫像に恋してしまい・・・というストーリーである。その神話を現代（といってもずいぶん前のイギリス）に舞台を移して翻案したのが、ショーの『ピグマリオン』で、さらにそれをミュージカル化したのが『マイフェアレディ』ということになる。このミュージカルがブロードウェイで大ヒットした時の主演はジュリー・アンドリュースだった。さらにそれを映画化したのが、今私達が見ているヘプバーン主演の映画『マイフェアレディ』というわけだ。

この作品の主題は、理想の女性を自分自身の手によって創造していこうとする男性の物語であると言える。しかし物語というものは、必ずしも主人公（あるいは作者）の思い通りになるというものではない。なぜならば主要な登場人物は、それぞれ自分自身の主体性を持っているからである。実際、ギリシア神話の『ピグマリオン』の最後は悲劇（単純には言えないが）であるし、ショーの原作でも、主人公のイライザは最後にヒギンズ教授のもとを去ってしまう。しかし、『マイフェアレディ』のストーリーは紆余曲折を経て、最後はハッピーエンドとなる。

居場所があるって素敵じゃない？

『マイフェアレディ』はミュージカルなので、ストーリーはその中で歌われる有名な曲とともに進行していく。そのほとんどが素晴らしいものだが、そのうちでも、私が最も好きな曲の一つが、ドラマの冒頭に近い場面、コベントガーデンの広場でイライザが歌う「Wouldn't it be lovely！」だ。

曲の美しさ、歌っているオードリー（残念ながら歌声は吹き替えだが）の表情と演技、どれをとっても胸を熱くさせる。

歌詞の内容は、一見単純に見える。「私が望むものは、どこかにある一軒の家。そこには、大きな椅子と、薪をいっぱいくべた暖かい暖炉と、チョコレート。そして私を守ってくれる大きな人がいる。それだけで、私は幸せ」（訳はテキトーです）。

貧しい環境で育ったイライザのささやかな夢を表現しているのだ、とも理解できる。その後のドラマの展開への伏線とも読める（チョコレートや暖炉を与えてくれる保護者としてのヒギンズ教授）。しかし、これは、誰にとっても普遍的な、こころのふるさとでもいうべき情景ではないだろうか。

そう。「居場所」なのである。「安心してそこにいることができる居場所」こそが、全ての人間が求めて止まない、基本的な信頼感をはぐくむところ、なのである。それはあまりにも当たり前のものなので、それが満たされている時には、私たちは何も感じない。しかしひとたびそれが失われたとき、それがどんなに私たちを強い希求に駆り立て、そのためにどれほどさまざまなことが人生に生じてくるか。それは夢であったり、努力であったり、恋であったり、病いであったり、犯罪であったり、生きる意味であったりするだろう。

ドラマの最後に、イライザはもう一度、コベントガーデンの広場へと戻り、自分の「居場所」を再体験し、それに自らわかれを告げる。そして、ヒギンズ教授との最後の対決（と和解）の場へと臨むのである。

「ことば」こそが橋を架ける

映画『マイフェアレディ』の主演はイライザ（オードリー・ヘプバーン）であることはもちろんだが、この作品でアカデミー賞の主演男優賞を獲得した、ヘンリー・ヒギンズ教授を演ずるレックス・ハリスンという男優は、オードリーに負けない、いやそれ以上の名優だと思う。

このヒギンズ教授の役所というのは、とてもおもしろい設定だ。彼は、言語学者（音声学）で、独身主義者で、（おそらく）マザコンで、永遠の少年タイプの中年（なんのこっちゃ！）だ。頭も良いし、口もたつ。それでいて、自分で自分のことを、紳士で、穏やかな男だと言ってはばからない、嫌みでキザな男でもある。

彼は、言語（ことば）の違いこそが、人間の階級を作り出し、階級間に溝を作り、人間同士の相互交流を不可能にしていると考えている。だから、正しいことばを教育すれば、階級をぶちこわし、人間同士の溝に橋をかけることができると信じている。そして、彼の信念を実践するために、イライザをその相手役（協働者）に選ぶのである。

イライザは貧しい下層階級で生活しているが、その生き方は決して悲惨でもなければ不幸でもない。彼女の父親は、全く働かずに娘に酒代をたかる、どうしようもないなまけもののようにみえるが、彼の生き方はある意味で哲学的である。イライザは決して、惨めな生活から脱出しようとしてヒギンズ教授に接近したわけではない。その証拠に彼女は、ヒギンズ教授に授業料を払う、と申し出る。

「ことば」は人間と人間をつなぐものであると同時に、その人間がどういう人間として自らを構成するかを内側から支えるものである。しかしことばは、時に空虚なものであり、ことばと、行為（愛）との統合が成就しない限り、人間は十全に生きるということはできないのだろう。ヒギンズとイライザとは、時には支配—服従関係に甘んじ、時に対立しあいながら、ことばと行為を結合させるべく、共に変容するものとしてのパートナーとなり、男性と女性、階級と階級、知と愛の間に橋を架けていく。

「わたし」は世界に開かれている

イライザと、ヒギンズ教授が、ヒギンズの母親の家で激しい議論を戦わせる場面がある。そこで、イライザがこう言う。

淑女（レディ）かどうかは、どうふるまうかによって決まるのではなく、どう扱われるかによって決まるのです。大佐は私を淑女として扱ってくれるので、大佐の前では私は淑女でいられます。しかし、教授は私をいつも花売り娘としてしか扱いません。ですから、私はいつまでも花売り娘のままなのです。

これは、かなりすごい主張だ。しかしある意味、日本人にはこれは分かりやすい。なにしろ日本では、世間が自分をどう見るかによって自分が決定されてしまう。つまり、自己（自分）は、閉じた独立した存在ではなく、世界に対して開かれており、世界との関係性が自己を形成する。これは、

あまり良くない意味で、日本人には常識なのだ。言葉を換えると、これは、自己（個人）が確立されていないという意味にも理解される。

しかし、西欧では違う。西欧（特に男性）の個人主義では、自己は、周囲から独立した、自立した存在として理解されるし、それこそが、成熟した自己のありかただとされてきた。それはヒギンズ教授の独身主義に象徴されている。しかし、イライザはそれに対して、「自己とは、世界との関係によっていかようにも変容する」と主張しているわけだ。これは、このミュージカルが大ヒットした時代から約50年後の、現代においても色あせていないホットな主張だといえる。結局ヒギンズの独身主義は、イライザとの関係に対して開かれることによって、もろくも崩れ去ることになる。やっぱりそうでなくっちゃね。

「あなた」と「わたし」の関係

ヒギンズ教授の特訓に耐えて、宮殿デビューを大成功裏に終えた直後からの、イライザとヒギンズのやりとりはものすごくおもしろい。舞踏会での大成功を得意げに披露し、盛り上がるヒギンズとそれに喝采を送る大佐、召使い達。部屋の隅にたたずみながら、一人憂鬱な表情のイライザ。

バカ騒ぎが終わり、「さあー。寝るぞ！」と去っていくヒギンズ。一人泣き崩れるイライザ。そこへ、脳天気なヒギンズが戻ってくる。「おかしいなあ、スリッパは何処へ行った？」。キッ！と顔を上げて、スリッパを投げつけるイライザ。「いったい、どう

したんだ。何を興奮している？」と、びっくりはするが、事態が全く飲み込めていないヒギンズ。

その後のやりとりを全部描写すると、ネタバレになるし、長くなるので、省略するが、ここからラストシーンまで、イライザとヒギンズの長く激しい対決、葛藤、対話が延々と続く。ありふれた男女の痴話ゲンカにも見えるし、非常に良くできたシナリオだとも思える。現実にも良くあるコミュニケーションだな、とも思える。しかしなんと言っても、男と女（一般化するの危険だが）が、お互いに惹かれあっているのに、なぜか修羅場化してしまうコミュニケーションの見事な範例がここに描き出されているように思えるのだ。一言で言うと、「関係性を巡る修羅場的コミュニケーション」の極めて良質な実例だと、私には思われる。

イライザの関心は「私（イライザ）とあなた（ヒギンズ）との関係」にある。すなわち、「あなたが私をどう思っているのか」「私があなただをどう思っているのか」ということである。しかし、ヒギンズにはそれが分からない。だから、イライザが、「私はこれからどうしたら良いの？」と嘆くのに対して、「そんなことを心配していたのか。色々な方法がある。花屋を開いても良いし、僕の母親に頼めば、誰か結婚相手を探してくれる」などと平然と応じてしまう。ヒギンズに悪意はないが、問題はイライザのこれからの人生であるとしても、その中に「自分（ヒギンズ）との関係」が入っているということに全く気づいていない。

そこでイライザが、「問題は私達の関係よ。人間的な関係がほしいの」と直面化しても、

「もちろん同じ考えだ。これまでもそうしてきたじゃないか。大佐だって同じさ」などと返してしまい、コミュニケーションはさらにこじれていく（といっても、最後は大団円になるのであるが）。

「あなたと私の関係」を直接対話の話題にとりあげても、「関係性に関する問題」は解決されるというわけではない。しかしその直面化は、少なくとも「関係性の変容」のきっかけにはなるだろう。色々なことを考えさせられるのだが、映画の最後のシーンのヒギンズのセリフが再び「スリッパはどこへ行った？」だったのが、妙に印象に残っている。

全ては主観的なもの？

イライザの突然の予想外の行動（要するにキレたのであるが）に、最初はどぎまぎしていたヒギンズであるが、途中からどうやら状況が理解できてきて、落ち着きを取り戻す。そして、こうイライザに告げる。「心配することはない。イライラというのは、全て主観的なものだ。ちょっと泣いて、お祈りをして、一晩寝て起きれば治る」

この「全て主観的なものだ」という言い方は、現代の医療現場でもよく使われる表現だ。一般には「それは単なる気のせいだ」というような意味で用いられる表現だ。もちろん、こんな言われ方をした病院の患者さんやイライザが、それで納得するわけではない。それどころか、このような言い方は、イライラをさらに際限なく悪化させる。実際、イライザはそうなった（それがストーリーを先に進める働きをするのであるが）。

しかし、なぜそうなるのだろうか？

「イライラ」とは「主観的な感情である」ということは、間違いではない。それどころか、この上もなく正しい言説であるとも言える。むしろ「イライラとは、現実存在する『モノ』だ。だから測定もできるし、取り除くこともできる」という言説の方がおかしいとも言える。最近の医療現場では、『落ち込み』や『イライラ』は、『脳内のセロトニンの異常』だと説明され、薬や電気ショック（オイオイ！）で取り除かれるべきものだ、というような極端な説明へシフトする傾向さえある。しかもそのような説明の方が、より「科学的」であり、より「正しい」と信じられてもいる。

しかし、もう少し考えてみたい。「私が感じているイライラ」と「私」は別のものだろうか？ 「私のイライラ」を取り除くということは、「私」を取り除くということになってしまうのではないだろうか？ イライザの「イライラ」は、ヒギンズへの愛そのものであり、イライザの人格そのもの顕れである。これを「一晩寝て起きれば治る」と言われてしまっただけでは、自分自身を否定されているのと同じことではないのか？

ここがとても難しいところだ。イライザの感情は、脳内のセロトニンに還元されることで解消するようなものではないことはもちろんだが、「それは、あなたの主観である」という、究極的に正しい言説によっても癒されるものではない。人間それ自体がまるごと尊重され、癒されるかどうかは、用いられることば、言説が「正しいかどうか？」で決まるものではないということなのだろう。しかし我々は、「正しい」ことを語ろうとする。それが、事態を更に悪化さ

せることが例え明白であっても、どうも私たちというのは、そういう風にできているようだ。

人生はマルチエンディング

どんな映画でも小説でもそうだと思うが、物語のクライマックスからエンディングにどうつながるか、というところが、その作品を失敗作にも成功作にもする。マイフェアレディのこの部分は、一見常識的なハッピーエンドのように見えるのだが、よく見てみると、けっこう複雑で、理解しにくい部分もあり、色々考えさせられる。ここは詳しく見ていく必要がある。

場面はなぜか、ヒギンズ教授の実母の家。そこに現れたイライザは、ヒギンズの母親に女性同士としての共感をもって迎えられる。実はこの設定もなかなか興味深い。日本だと、嫁姑関係に象徴されるように、息子の恋人と母親の関係というのは、一種の緊張関係になりやすいと思うのだが・・・しかし、ユーミンの「ルージュの伝言」の例もあるし・・・うーん、良く分からないが、ここは本筋には関係ないからとばして先へ行こう。

そこへ、まさかイライザが来ているとは知らずに現れるヘンリー・ヒギンズ教授。超然と独立した人生を歩んでいるように見えて、困ったことがあるとすぐに母親に泣きついてくるところは彼らしい。しかし、母親は徹底してイライザの理解者である。

母親が席を外し、再び気まずい雰囲気でも対するヘンリーとイライザ。しばらくテンポの良いやりとりのあとで、イライザは

名曲「without you!」を歌い出す。

私はなんて馬鹿だったのかしら？ あなたが世界の全てだと思っていた。でも今はそうじゃないということが分かる。あなたなしでも春は巡ってくる。あなたなしでも、午後のお茶はおいしい。あなたなしでも、ウインザー城は倒れない！ あなたなしでも私は生きていける！

高らかに歌うイライザを、最初苦々しげに見つめていたヘンリーの表情が変わり、彼は突然椅子から立ち上がり、叫ぶ。

ハッハッハー！ やったぞ！ とうとうやった！ 思いどおりの女性ができた。自立した女性だ！ 5分前まで、君は僕にとってのお荷物でしかなかった。しかし、今はどうだ。君は立派な僕の同僚だ！

この場面は、とても複雑だ。ヘンリーとイライザの関係は、二転三転している。確かにここでの二人の関係はすでに以前の関係ではない。しかし、その関係をまるごと、ヘンリーはもう一度自分の手の内に取り戻そうとしているように見える。もしも、イライザが自立した女性として変容したのだとしても、そのプロセスがヘンリーによって計画され、教育された産物に過ぎないのだとしたら、自立した女性としてのイライザは本当に自立していると言えるのだろうか？ これはパラドックスだ。

しかし、イライザはその手には乗らない。彼女は、きりりとした表情でヘンリーを見据え、きっぱりとこう告げる。

さようなら、先生、もうお目にかかりません。

そしてふりかえることなく去っていくイライザの、この上もない誇り高さは、オードリーの名作「ローマの休日」の一場面を思い起こさせる。たった24時間のローマでの何ものにも代え難い体験を胸に秘めて宮殿へ戻ったアン王女（オードリー）が、大使や将軍に向かって、こう告げるシーンである。

何が王女の義務であるか、私はよく承知しています。もしそうでなかったら、私は今ここに戻ってはいなかったでしょう。

もちろんこの言葉の背後には、恋人であ

るジェフとの永遠の別れを決断したこの上もない辛さが横たわっている。このような崇高な凛々しさは、オードリーの天性のものであると思う。

・・・というわけで、結局、色々あったが、自立した女性としてのイライザは、自分を育てた教師であり、恋人でもあったヘンリー・ヒギンズ教授と訣別し、巣立ち、自立した人生を送る・・・かと思いきや・・・まだまだ、この先に展開があるのだ。

うーん。やっぱり、人生というものは、単純なストーリーじゃあないね。人生は、マルチエンディングのロールプレイングゲームのようなものだね。ラスボス一人倒せば、それで終わりじゃあない。ハーゴンの後にはシドーが、バラモスのあとにはゾーマが控えているのだよ。